

一国立大学法人医学部における職場巡視結果の経年的分析 第2報

井奈波良一, 長縄 孝

岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野

(平成 23 年 12 月 13 日受付)

要旨:【目的】国立大学法人医学部における労働安全衛生管理体制の問題点を洗い出す。

【方法】A 大学医学部で衛生管理者等によって 183 回実施された職場巡視の実施記録を基に, 各分野等別に, 古澤ら¹⁾の指摘項目分類を一部改変した 13 種類の指摘項目について指摘件数, 改善件数, 再指摘件数について其々集計した。

【結果と考察】1. 改善結果報告書提出義務化後の 4 巡目と 5 巡目の職場巡視における指摘件数(それぞれ 160 件, 123 件)は, 1 巡目~3 巡目(それぞれ 427 件, 188 件および 246 件)に比べて, 少なくなっていた。2. 職場巡視指摘項目別割合は, 4 巡目と 5 巡目における指摘 (283 件) のうち割合が最も高率であった項目は「薬品管理」(24.0%) であった。1~3 巡目に比べて, 4 巡目と 5 巡目では, すべての居室に関する「柵等転倒防止」および「柵から落下防止」の指摘割合が有意に低下し (いずれも $P < 0.001$), 一方実験室に関する「薬品管理」, 「通路・避難経路の安全」および「ガス・ボンベの安全管理」の指摘割合は有意に増加していた (いずれも $P < 0.001$)。3. 4 巡目, 5 巡目の指摘事項に対する改善率は, 基礎系分野(それぞれ 93.1%, 82.3%), 臨床系分野(それぞれ 100.0%, 93.4%) および事務系 (それぞれ 100.0%, 100.0%) であり, いずれも 3 巡目(基礎系分野 68.3%, 臨床系分野 62.2%, 事務系 66.7%) より改善率が高かった。

【結論】今後も経年的に職場巡視結果分析を継続し, 医学部教職員の職場環境の改善と安全に対する意識を高めていく必要がある。

(日職災医誌, 60: 222—225, 2012)

—キーワード—

職場巡視, 安全衛生, 医学部

はじめに

著者ら²⁾は, 国立大学法人医学部における労働安全衛生管理体制の問題点を洗い出す³⁾目的で, A 大学医学部で衛生管理者等によって実施された職場巡視の実施記録を基に, 各分野等別に, 指摘件数, 改善件数, 再指摘件数について其々集計した結果, 指摘項目件数で最も多かったのは「柵から落下防止」であり, 2 番目は「柵等転倒防止」, 3 番目は「通路・避難経路の安全」であった。また, 各分野等別の 3 巡分の職場巡視における再指摘件数割合は 2 巡目より 3 巡目の方が基礎系分野, 臨床系分野, 事務系の何れも増加し, 指摘項目の改善率が経年的に悪くなっている傾向があった。

そこで, この分析結果を医学部安全衛生委員会で審議し, 指摘項目の改善率を高める一助として, 指摘された各分野には改善結果報告書の提出期限を定め, 安全衛生管理に対するさらなる推進を図った。今回, 4 巡目, 5

巡目の職場巡視が終了し, 職場巡視の指摘項目および改善状況の変化について検討したので報告する。

対象と方法

A 大学医学部の各研究室では, 特定化学物質・毒物・劇物・引火性薬品等の多種少量な危険薬品を日常の研究実験で使用されている中, 衛生管理者等による職場巡視で研究室内での様々な安全衛生上の改善点が指摘され, リスク低減に努めてきた安全衛生管理活動について分析した。具体的には, 平成 19 年 4 月から, 23 年 3 月までの対象期間に衛生管理者等によって実施した職場巡視回数は, 1~3 巡目が 115 回, 4~5 巡目については 68 回 (計 183 回) であった。これらの職場巡視実施記録を基に, 各分野等別に, 古澤ら¹⁾の指摘項目分類を一部改変した「柵等転倒防止」, 「柵から落下防止」, 「4S」など 13 種類の指摘項目について指摘件数, 改善件数, 再指摘件数について其々集計した。なお, 「柵等転倒防止」のうち「冷蔵庫

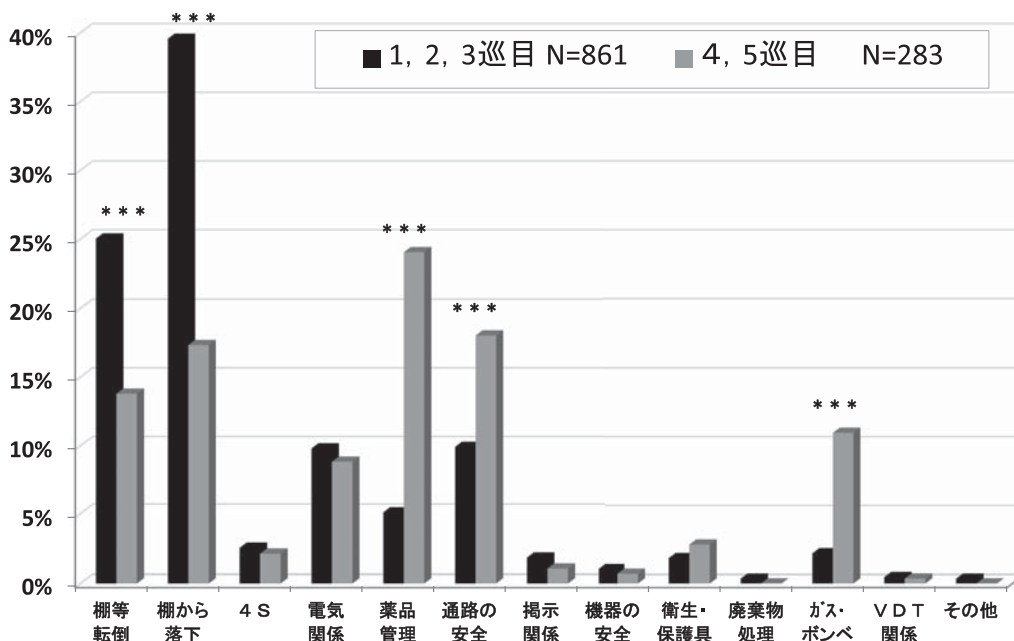


図1 職場巡視指摘項目別割合の変化
1, 2, 3巡目と4, 5巡目の差：***P<0.001

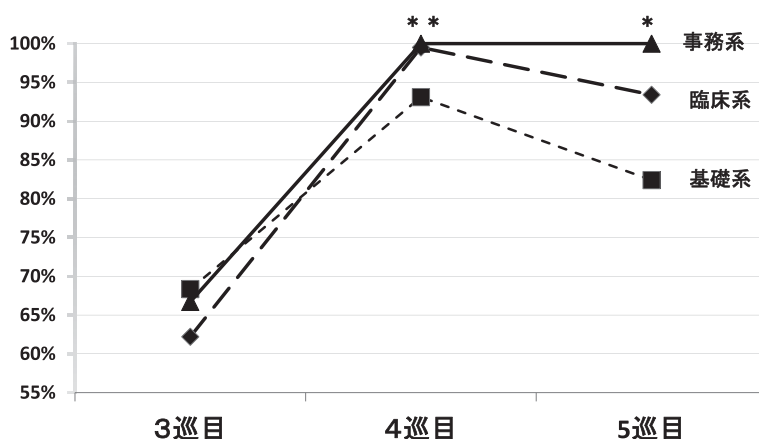


図2 職場巡視指摘事項の改善状況
3群間の差：**P<0.01, *P<0.05

の固定」についての対応策は、医学部全体として取り組む予定となっているため今回の分析から除外した。

有意差検定は、 χ^2 検定または Fisher の直接確率計算法を用いて行い、 $P<0.05$ で有意差ありと判定した。

結 果

1巡目～3巡目の指摘件数は、それぞれ427件、188件および246件であった。一方、4巡目と5巡目の指摘件数は、それぞれ160件、123件であり、1巡目～3巡目に比べて指摘件数は少なくなっていた。

図1は職場巡視指摘項目別割合の変化を示したもので、4巡目と5巡目で指摘(283件)のうち割合が最も高率であった項目は「薬品管理」の24.0%(68件)、次が「通路・避難経路の安全」(18.0%, 51件)であり、以下

「棚から落下防止」(17.3%, 49件), 「棚等転倒防止」(13.8%, 39件), 「ガス・ボンベの安全管理」(11.0%, 31件)の順であった。1～3巡目(861件)に比べて、4巡目と5巡目では「棚等転倒防止」および「棚から落下防止」の指摘割合が顕著に低下し(いずれも $P<0.001$)、一方「薬品管理」, 「通路・避難経路の安全」および「ガス・ボンベの安全管理」の指摘割合は有意に増加していた(いずれも $P<0.001$)。

図2は職場巡視指摘事項の改善状況を示し、3巡目の改善率は、基礎系分野(68.3%), 臨床系分野(62.2%)および事務系(66.7%)であり、3群間で有意差はなかった。4巡目の改善率は、基礎系分野(93.1%), 臨床系分野(100.0%)および事務系(100.0%)であり、基礎系分野が有意に低率であった($P<0.01$)が、いずれも3巡目より

改善率が極めて高かった。5 巡目の改善率は、基礎系分野 (82.3%)、臨床系分野 (93.4%) および事務系 (100.0%) であり、基礎系分野が最も低率であった ($P < 0.05$) が、いずれも 3 巡目より改善率が高かった。

考 察

近年、国立大学法人における職場の安全衛生管理については、労働安全衛生法が適用されたことにより大学内の安全と安心を職員自ら守らなければならなくなった¹⁾。その一環として産業医、衛生管理者による職場巡視が開始された。しかし、大学という特殊な研究教育機関では様々な立場の人が寄り集まる中で、職場の安全衛生管理を推進するのは容易なことではない。

本調査の A 大学医学部では各分野等別の職場巡視実施結果については、指摘項目に関する写真入りの巡視報告書とし、医学部長、安全衛生委員長等で確認後、其々の分野等別責任者に報告書を渡し、指摘項目の改善を促している。職場巡視を重ねるごとに職員の対応も少しずつ変わり、分野によっては職場環境の改善をして自主的に安全で安心できる職場づくりをしなければならないという意識を持つようになってきた。しかし、職場巡視における指摘項目の改善率が、全体でみると経年的に悪くなっている傾向があった²⁾。そこで、指摘項目の改善率を高めるために、期間を定めて各分野から改善結果報告書を提出してもらわざるを得なかった。その結果、4 巡目と 5 巡目の指摘件数は、1 巡目～3 巡目に比べて、少なくなっていた。さらに、4 巡目と 5 巡目の指摘事項の改善率も、1 巡目～3 巡目に比べて、高くなっていた。この結果から、改善報告書提出に一定の効果があったと考えられる。しかし、基礎系分野の改善率は、臨床系分野、事務系に比べてやや低かった。このこともあって、平成 23 年度から年 1 回、「職場巡視のポイント」と題して、職場巡視の意義、目的等を含めた学内安全衛生教育研修会を開催している。

A 大学医学部における職場巡視指摘項目に関して、4 巡目と 5 巡目で指摘割合が最も高率であった項目は毒物・劇物管理等の「薬品管理」(24.0%) であり、2 番目が「通路・避難経路の安全」(18.0%) であり、以下「柵から落下防止」(17.3%)、「柵等転倒防止」(13.7%)、「ガス・ボンベの安全管理」(11.0%) の順であった。また、1～3 巡目に比べて、4 巡目と 5 巡目では、すべての居室に関する「柵等転倒防止」および「柵から落下防止」については転倒防止対策工事等により指摘割合が有意に低下したのに対し、実験室に関する「薬品管理」、「通路・避難経路の安全」および「ガス・ボンベの安全管理」の指摘割合が有意に増加していた。最近、九州大学の一センターで、

実験に使用していたヒ素化合物紛失事件が発生した⁴⁾ことがマスコミ等で取り上げられ、毒物及び劇物等が重大な事故・事件を惹起する可能性が高いことから適正な管理の徹底が求められている⁵⁾⁶⁾。実際、著者らの印象では、医学部の研究者の中には、あいかわらず、毎日の実験の中で法規制を受けている危険な化学薬品等を使用しているという認識が薄い者もいた。さらに、災害に至る事故が発生すると、事故を起こした研究室だけで対処できる範囲だけでなく、いろいろなところに影響をおよぼす⁵⁾。また、今回の分析対象から除外した大型冷蔵庫が実験室に多く設置されていることから、緊急に転倒防止対策を実施する必要がある。これらのことから、医学部の職場巡視でも最終的に実験室の安全衛生管理が最重要課題になると考えられる。そこで、前述の「職場巡視のポイント」と題する学内安全衛生教育研修会において、職員のより一層の安全意識の向上を目指す目的で、依然として指摘されるタコ足配線防止²⁾だけでなく、薬品管理および冷蔵庫の固定について重点的にとりあげ、周知徹底することになった。

最後に、今後も経年的に医学部職場巡視結果分析を継続し、医学部教職員に有効な安全衛生教育・研修を実施して職場環境の改善と安全衛生に対する意識を高めていく必要がある。

文 献

- 1) 古澤真美, 梅景 正, 大久保靖司: ある国立大学法人における産業医職場巡視指摘内容の検討. 産業衛生学雑誌 51 (臨時増刊): 504, 2009.
- 2) 井奈波良一, 長縄 孝: 一国立大学法人医学部における職場巡視結果の経年的分析. 日職災医誌 58 (4): 180—183, 2010.
- 3) 竹田 透: 産業医の職場巡視. 産業医学レビュー 22: 55—68, 2009.
- 4) 九州大学: お知らせ 本学におけるヒ素化合物 (ヒ酸 1 水素ナトリウム) の紛失について. http://www.kyushu-ac.jp/notice/index_read.php?kind=&S_Category=&S, 2011/11/29.
- 5) 平野敏右: 研究機関における安全衛生管理の現状と課題. 安全と健康 8: 1065—1070, 2007.
- 6) 長谷川紀子: 東京工業大学における安全衛生管理の推進. 安全と健康 8: 1071—1078, 2007.

別刷請求先 〒501-1194 岐阜市柳戸 1—1
岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野
井奈波良一

Reprint request:

Ryoichi Inaba
Department of Occupational Health, Gifu University Graduate School of Medicine, 1-1, Yanagido, Gifu, 501-1194, Japan

Chronological Analysis of the Results of a Round of Inspection in a National University, School of Medicine in Japan Report 2

Ryoichi Inaba and Takashi Naganawa

Department of Occupational Health, Gifu University Graduate School of Medicine

Purpose: To dig out the problems in the occupational safety and health management system in the National University, School of Medicine in Japan.

Method: The number of cases pointed out, number of improvement and the number of cases pointed out again in 183 records of the round of inspection practiced by the occupational health managers, were analyzed in the National University, School of Medicine A.

Results and Discussion: After mandatory presentation of the improvement report, the numbers of indication in each round of inspection were decreased, compared with those before. Next was, the item where indication percentages were the highest was “the drug management”(24.0%). After that, percentages of the numbers of indication for “management of harmful chemical substances”, “problems of a safety measure concerning passages and routes of refuge” and “safety management of the gas cylinder” relating to the laboratories were significantly increased, and percentages of the numbers of indication for “prevention against fall of racks, lockers and etc.” and “prevention against falls from racks” were significantly decreased, compared with those before ($P < 0.001$). After that, percentage improvement of the indication all in the basic and clinical medicine departments and section pro-office works were increased, compared to those before. These results suggest that it is useful to continue chronological analysis of the results of a round of inspection and heighten the consciousness of staffs for the improvement of work environment and the safety in the school of medicine.

(JJOMT, 60: 222—225, 2012)